

Title	近畿方言の「ル・ラル」敬語に関する一考察
Author(s)	宮治, 弘明
Citation	阪大日本語研究. 1994, 6, p. 77-92
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/6804">https://hdl.handle.net/11094/6804</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 近畿方言の「ル・ラル」敬語に関する一考察

On the Formation of the Honorific Auxiliary Verb  
Ru·Raru in the Kinki Dialect

宮 治 弘 明

MIYAJI Hiroaki

キーワード：近畿方言，「ル・ラル」敬語，通時的研究，近世上方語，  
活用の四段化

## 1. はじめに

国立国語研究所の『日本言語地図』の刊行を一つの契機として、語史研究の分野を中心に文献国語史研究の成果と方言研究の成果とのつき合わせがそれ以前よりも活発に試みられるようになった。その中で特に注目されるのは、両者の構築する語史が完全には一致しない場合が多いという事実そのものに焦点をあて、両者が扱う資料の位相面での違いを考慮に入れることによって双方の不一致を有機的かつ統合的に解釈しようとする立場である（小林 1983, 1987, 彦坂 1989, 1991）。

さて、尊敬の意味を表す助動詞の「ル・ラル」は、時代を下るにつれ形の上では「ルル・ラルル」、「レル・ラレル」と変化していったが、敬意の面であまり高くない表現として位置づけられながら、中古以来現代に至るまで継続して用いられているという点で、日本語の敬語史上においても極めて特異な形式と言える。一方、本稿で取り上げる近畿方言には、現在標準語の敬語として認められている「レル・ラレル」とは意味・用法の点で区別される「ル・ラル」敬語が「レル・ラレル」と共存する形で認めら

れる。いわゆる「ハル」敬語の隆盛によって各地で衰退の度合いが著しい「ル・ラル」敬語であるが、その出自（特に古典語の「ル・ラル」との関係）を明らかにすることは、日本語の敬語の歴史を考える上でも看過できない重要な課題であると思われる。

本稿では、方言研究と文献国語史研究との提携に位相論的な観点を導入することによって方言の通時的研究を推進させる試みの一つとして、近畿方言における「ル・ラル」敬語の歴史的展開について従来の議論を参照しつつ考察していくことにする。

## 2. 方言敬語としての「ル・ラル」

近畿方言における「ル・ラル」敬語は、京都市北区の一部（中川北山町）と山城南部（特に相楽郡）、滋賀県のほぼ全域、奈良県北和地方、大阪府交野市及び和泉市において用いられていることがこれまでに確認されているが、これと古典語の「ル・ラル」敬語との関係をめぐっては、従来いくつかの議論が展開されている。

まず、西宮一民氏は、奈良県北和地方の「ル・ラル」敬語について、これを動詞の連用形に「アル」が接続したものから派生したものとしてとらえ、古典語の「ル・ラル」敬語の残存と見なす考えを否定されている。その根拠としては、「来る」や「する」の場合に未然形接続ではなく連用形接続となる（「きラル」および「しラル」となる）こと、また、補助動詞として用いられる場合に「～ていラル」ではなく「～てラル」となることをあげておられる（西宮 1959）。

一方、奥村三雄氏は、京都・滋賀・福井に見られる「ル・ラル」敬語について、活用が五段活用的である点を問題とされ、古典語の「ル・ラル」敬語との関係を疑問視し、現代諸方言における敬語辞の分布状況を検討した上で、西宮氏が先の論文で退けた「ハル」敬語からの派生としてとらえる考えを支持されている（奥村 1961, 1966）。ただし、後者の論文の注10において次のように述べ、古典語の「ル・ラル」敬語との関連の可能性を

全く否定してはおられない。

尤も、近畿諸方言のル・ラルが五段活用であるという事は、それがレル（下一or二段）と同系だという考え方を、根本的に否定する訳ではない。即ち、使役辞ス・サス、敬語辞シャル・ナサル等、何れも、近世京阪語において、下二or一段→四段という活用変化が認められるからである。

なお、近畿方言の「ル・ラル」敬語を古典語の「ル・ラル」敬語からではなく「ハル」敬語から派生した形式と見る考えは、藤原与一氏や佐藤虎男氏によっても提示されている（藤原 1978, 奈良県教育委員会 1991）。

これに対して、松浦信子氏は、近畿方言の「ル・ラル」敬語を古典語の「ル・ラル」の末裔と見る考えを主張し、西宮氏と奥村氏が指摘した問題点に直接答える形で次のような論を展開しておられる（松浦 1962）。

まず、「来る」や「する」に「ラル」が接続する場合に未然形に接続する形（「こラル」や「せラル」）ではなく連用形に接続する形（「きラル」や「しラル」）となる点については、近世上方語の文献資料にこうした例が既に見られることに注目し、こうした現象は近世初期の上方語で一般的であったものが現在まで残存したものと考えておられる。また、動詞の未然形に接続する「ラル」が接続助詞の「テ」に直接つく（例えば「見テラル」となる）ことについては、これを「テイラル」の縮約形、すなわち、接続助詞「テ」＋「イル」の未然形＋「ラル」における母音音節[i]の脱落と考えることで解決しておられる。

一方、「ル・ラル」の五段活用的な性格については、本来下二段活用であったものが五段化（実際には四段化）したものととらえ、近畿方言の「ル・ラル」敬語がいずれも五段（四段）化している事実をもとに、活用が変化することが残存の要因として働いたものと推定されている（ちなみに、尊敬以外の意味を表す場合には、「ル・ラル」敬語を用いる地域でも「レル・ラレル」が用いられる）。その傍証としては、現在五段活用である敬語動詞（「オッシュアル」や「イラッシュアル」など）の前身がいずれも「ル・ラル」の接続したもの（「仰セラル」や「イラセラル」）であっ

たという事実をあげておられる（この事實は、先述のとおり、奥村氏も軽視できないものとしてその重要性を認めておられる）。

松浦氏の論は、西宮氏と奥村氏が指摘された近畿方言の「ル・ラル」敬語に関する問題点を解消するような具体的な言語事実をもとに展開されているだけに十分な説得力をもっていると思われる。松浦氏の主張を補強する事実をさらにつけ加えるならば、現存する「ル・ラル」敬語の待遇的な意味と用法上の特色をあげることができる。従来報告および筆者自身の調査を総合するならば、近畿各地の「ル・ラル」敬語の多くは、待遇的な意味が相対的に低い（すなわち敬意の度合いがあまり高くない）という点と、一般に第三者を話題にする場合に用いられる形式（すなわち話し相手に直接用いられることが稀）であるという点で「ハル」敬語とは明確に区別されるものである（西宮 1959, 松浦 1962, 宮治 1987）。

よく知られている事実であるが、ロドリゲスの『日本大文典』の記述によれば、室町時代末期の「ルル・ラルル」も「この助辞だけで話した場合には、この国語が持つてゐる敬意の中で最も低い程度を示す」ものであり、用法としては「いくら畏敬又は尊敬を払ふに価する人々に就いて、主にその人の居ないところで話す場合に使ふのが常」であった（土井 1955）。また、山崎久之氏も、近世前期の上方語における「ルル・ラルル」が「対称で使用されること僅少であるのに、他称では普通に使用する語」であったことを指摘しておられる（山崎 1963）。それゆえ、現存の「ル・ラル」は、待遇的な意味と用法面から見ても古典語の「ル・ラル」（実際の形としては「ルル・ラルル」）と共通点を有すると考えられる。

さらに、近畿方言の「ル・ラル」敬語を地理的分布の観点から検討してみると、文献資料に現れる近世語の実態を継承する地域でありかつ近畿中央部の文化的な二大中心地である京都市と大阪市とをちょうどとりまくように、方言敬語としての「ル・ラル」を使用する地域が認められることに気づく。近畿中央部という狭い範囲に限ってではあるが、文化的中心地の周辺において、庶民階層の話し言葉である方言の中に残存するような形でこの形式が分布するという事實は、従来あまり注目されることがなかった

ようであるが、その歴史的な展開を考える上でかなり重要な意味をもつものと思われる。

以上のことから、松浦氏が主張されるとおり、近畿中央部の各地に見られる「ル・ラル」敬語は古典語の「ル・ラル」敬語の末裔としてとらえることが可能であると考え。そこで、次章以下では、現存の「ル・ラル」敬語を近世上方語に見られる「ルル・ラルル」敬語（以後特に断らない限り単に「ルル・ラルル」とする）と結びつけて考える立場から、その歴史的展開を追究することにする。その際、最も重要かつ困難な課題となるのは、「ルル・ラルル」の下二段活用から四段活用への変化の可能性の検討とその要因の解明である。

### 3. 近世上方語における下二段活用の四段化

さて、近世上方語における活用の変化としてしばしば取り上げられるのは、二段活用の動詞や助動詞が一段化するという現象であるが、実はそれと同じ時期に、下二段活用の動詞や助動詞の一部に四段化という現象も生じている。これには、「任スル」、「合スル」、使役の助動詞「スル・サスル」などのサ行のものと、「メサルル」、「ナサルル」、「下サルル」、「(サ)ッシャルル」などのラ行のもの（いずれも敬語関係の動詞や助動詞）とがあるが、本稿の対象となる「ルル・ラルル」との関連が深いラ行下二段活用の四段化については、坂梨隆三氏や山県浩氏が近世前期上方語の実態について詳しく調査されている（坂梨 1975, 山県 1983）。

まず、坂梨氏は、狂言や近松世話物を主な資料として検討され、「メサルル」、「下サルル」、「ナサルル」という順序で四段化が進行すること、また活用形に関しては、命令形が語尾の「イ」を落とす形（メサレイ→メサレ）で早くから四段化したこと、終止連体形「ルル」も語尾の「ル」を落とす傾向が見られることなどを明らかにされている。そして、終止連体形における「ル」の脱落の要因として、活用形に関する終止形と連体形の区別の消滅を指摘し、次のような考えを述べておられる。

「る」が「るる」になってしまった段階では、終止形と連用形とが同形になったのだから、その限りにおいては「るる」でなければならぬという必然性はない。〈中略〉これは終止連体形に独自に存する四段化への潜在的な力と見ることのできるものだろう。

一方、山県浩氏は絵入狂言本に見られるラ行下二段活用の四段化現象を同時期の資料とされる近松世話物や後期の洒落本資料と対照する形で検討され、「(サ)ッシャルル」と「オッシャルル」における四段化は「下サルル」や「ナサルル」よりも著しいこと、活用形別に分けた場合には〈命令形・終止連体形・連用形・未然形〉の順で四段化が進行している（命令形で盛ん、未然形では少ない）こと、否定辞「ヌ」が下接する場合には下二段形が用いられやすいこと、さらにこれらの傾向は近松世話物においてもほぼ認められることなどを指摘されている。

ところが、助動詞の「ルル・ラルル」の場合には、近世上方語の文献で四段化の例が見られることが非常に少なく、全体としては従来からの下二段活用を保持していると思なしてよいようである（湯沢 1962）。

坂梨氏によれば、近松世話物24篇においても助動詞「ルル・ラルル」の四段化と見なせるもの（「(ラ)ルル」→「(ラ)ル」と認められるもの）は、会話文中にわずか8例見られるだけ（しかも意味は尊敬だけでなく受身や可能を表す場合もある）であり、会話文中の用例の95%以上（97例）は下二段活用で占められる（ちなみに下一段活用の用例は2例のみ）。坂梨氏は8例の「(ラ)ル」のうち5例までが老年層のことばであることを重視し、「古めかしい表現」として用いられていたと解釈されている。

また、山県氏も絵入狂言本において「(ラ)ル」が見られるのは、侍の改まった発話の場合だけであることを指摘しておられる。ただし、坂梨氏とは異なり、この「(ラ)ル」を終止連体形として用いられる「(ラ)ルル」の語尾の「ル」が脱落したものとせず、「『文語めかし』によって作られた一種の旧終止形」と見ることを主張し次のように述べておられる。

古めかしさを出すために（特に、確認している例すべてが会話文にしか見えないことから、会話の表現を豊かにしようとして）、作り出さ

れた語形とするのが、妥当であろう。

山県氏の説は、この形式を書き言葉の一用法に止まるものとして位置づけるものであり、当時用いられた口語のある側面を反映するという見方を否定する立場のようであるが、いずれにせよ、近世上方語の代表的な資料においては、敬語形式としての「ルル・ラルル」が四段化の傾向を示すとは言い難いようである。それゆえ、現存の方言敬語としての「ル・ラル」をこの時期の「ルル・ラルル」と関連づけて解釈するためには、新たな観点からの考察が必要不可欠となる。

なお、サ行下二段活用に属する使役の助動詞「スル・サスル」の四段化現象の実態は、奥村三雄氏や山県浩氏の研究によってかなり明確になっている（奥村 1967, 山県 1982）。特に、近世上方語の資料と現代方言における分布状況とをつき合わせる形で検討した奥村氏は、近世を通じて下二段式と四段式の両方が見られるものの、前期よりも後期において四段式の用例が多いという事実と、現代方言における使役の助動詞の四段化が近畿を中心に四国・山陽・北陸西部などで進んでいるのに対し、近畿から離れた東北や九州などでは下一段または下二段活用であるという事実を総合的に解釈した上で、「現代京都語の使役辞四段式は、比較的新しい時代における活用変化の所産」であること、さらに、「その活用変化は近世あたりに行われたもので、少なくとも宝暦頃には、大体完了していた」ことを主張しておられる。

以上述べてきた諸研究をもとに議論を展開するならば、近世上方語における下二段活用の四段化は、ラ行の場合とサ行の場合とでその進行状況に違いがあったと考えることが可能であると思われる。すなわち、ラ行の四段化とサ行の四段化とは一方が他方に影響を与えるという形ではなく、互いに別個の要因によって独自に四段化していったものと見なす考えが成り立つわけである。この推論は、使役の助動詞が四段化しない地域（例えば、東京や九州など）でも、ラ行に属する「ナサル」や「シャル」及びそれらからの派生形の場合には四段化を起しているという事実からも支持されるものと言える。そこで、本稿では、近畿方言の「ル・ラル」敬語を「ル



ル・ラルル」が四段化することによって生じたものであることを、使役の助動詞「スル・サスル」の四段化現象とは関連づけない形で説明する方向で議論を進めることにする。

#### 4. 「ルル・ラルル」敬語の四段化

さて、近世上方語の資料において「ルル・ラルル」の四段化という現象がほとんど見られないのはなぜであろうか。ここで注目されるのが、松浦氏や奥村氏が指摘された動詞に尊敬の助動詞「ルル・ラルル」が接続したものが一語化することによって生じた敬語動詞や敬語助動詞（すなわち、「メサルル」、「下サルル」、「ナサルル」、「(サ)ッシャルル」など）がいずれも四段化の傾向を示す点である。こ本稿では、この事実をこれら敬語の動詞や助動詞全体に四段化への流れがあったことを示唆するものとしてとらえ、「ルル・ラルル」の四段化の例がほとんど見られない文献資料の状況を以下のように解釈する。

坂梨氏が説かれるように、これらの文献資料が描き出す京阪語（すなわち、近畿中央部の上層階層のことば）では、「ルル・ラルル」をそのまま動詞に接続するだけという表現は、尊敬表現としては既に古風なものと思われていた。その上、この表現の敬意自体も高くないために上層階層の話し言葉ではあまり使用されなくなっていたものと考えられる。そこで、「ルル・ラルル」よりも新しく、敬意の面でも上位に位置する形式（いずれも「ルル・ラルル」からの派生と見なせるもの）が「ルル・ラルル」に代わって広く用いられるようになった。それゆえ、「ルル・ラルル」そのものではなく、それから派生した諸形式が四段化現象の中心的存在となっていたのである。これに対して、京阪の近隣地域や中央部でも文献資料に現れない階層（すなわち、武士や町人や遊廓の関係者以外の人々）においては、尊敬の助動詞としての「ルル・ラルル」の単独用法が日常生活で継続して使用されたため、「ルル・ラルル」そのものが四段化の道をたどることになったものと考えられる。

それでは、尊敬の意味の「ルル・ラルル」が四段化を起こす要因としては、どのようなものが想定できるであろうか。これには、「ルル・ラルル」という助動詞が尊敬の意味だけではなく、受身や可能や自発の意味を表す形式としても用いられるという言語内的な要因が深く関与している。つまり、尊敬の意味の「ルル・ラルル」の四段化現象を、「ルル・ラルル」自身が抱える意味機能の過剰負担の軽減および意味の混同の回避という方向への変化としてとらえるわけである。

従来からも指摘があるように、古典語の「ル・ラル」の意味機能の解釈において最も混同されやすいのは、尊敬を表す場合と受身を表す場合である（辛島 1993）。これは、現代語の「レル・ラレル」についても当てはまることであるが、その言語的な要因としては、尊敬と受身の場合には述語と主体との呼応関係が共通する（現代語では主体が常にガ格をとる）のに対し、可能の場合は述語と主体との呼応関係が他の二つとは異なる（現代語では主体がガ格ではなくニ格をとることが多い）ことがあげられる。具体例をあげて示すならば次のようになる。

- |                            |        |
|----------------------------|--------|
| ○ A 先生ガ 納豆ヲ 食べラレタ          | < 尊敬 > |
| ( “食べた” 主体はガ格の A 先生 )      |        |
| ○ A 先生ガ 納豆ヲ 食べラレタ          | < 受身 > |
| ( “食べラレタ” 主体はガ格の A 先生 )    |        |
| ○ A 先生(ニ/ガ) 納豆(ガ/ヲ) 食べラレタ  | < 可能 > |
| ( “食べラレタ” 主体はニ格・ガ格の A 先生 ) |        |

さらに、尊敬と受身の場合には、主体を表すガ格に有情物がくることが一般的であるのに対し、可能の場合には客体としてのガ格に非情物がくることが少なくないという事実も考慮すべきであろう。

それゆえ、尊敬を表す場合と受身を表す場合とを形式の上で区別する必要性の方が、尊敬と可能あるいは受身と可能とを区別する必要性よりも高くなると考えられる。その際、どちらの意味を表すものの方に変化が生じやすいかということが問題となるが、これについては、両者が同時に使用

されて同じ形式が重出する場合を想定するならば、相互承接において受身形式の後に来る尊敬形式の方が活用語尾としてとらえられやすくなる関係上、当然尊敬形式の活用型の方に変化が生じる可能性が高くなるものと考えられる。

尊敬の意味の「ルル・ラルル」の四段化をこの形式の意味機能の負担軽減（意味の不透明さの解消）という要因で解釈する考えの有効性は、近世語に始まり現代語においても進行中の可能動詞の一般化、すなわち「行ケル」や「見レル」や「来レル」の隆盛という事実からも支持される。例えば、田中章夫氏は、東京語において一段動詞やカ変動詞に新しい可能動詞（「レル」形）の使用が広まった要因として、可能動詞が可能の意味を表す専用の形式として好まれたことをあげ、東京語においては、尊敬の意味で「レル・ラルル」があまり使用されない（「オ〜ニナル」や敬語動詞の使用が盛んである）ために、伝統的な「レル・ラルル」が受身の意味を表す場合に限定される傾向にあると述べておられる（田中 1983）。すなわち、東京語では尊敬表現として他の形式が広く用いられるため、「レル・ラルル」は主として受身と可能の意味を表すために用いられることになり、そこで両者を形式の上で区別する必要から可能動詞の一般化が促進されたということになる。

これに対して、京阪の近隣地域のように、近世期から尊敬の助動詞として「ルル・ラルル」を日常生活で使用していたと考えられる地域では、まず尊敬の意味の「ルル・ラルル」を受身や可能の「ルル・ラルル」と形式上区別するために、活用型が下二段から四段へと変化したものと想定することができよう。この考えが認められるならば、助動詞の「ルル・ラルル」は他の語形からの影響がなくても、自らが内包する言語内的な要因によって四段化しようということになる。

なお、近畿における「ルル・ラルル」の四段化の時期としては、終止形と連体形との合一（連体形終止の確立）以後、二段活用の一段化が一般化する以前を想定するのが最も妥当であると思われる。つまり、「ルル・ラルル」の四段化は、一段化の過程を経ず下二段式から直接生じたものと考え

えるのである。なぜなら、助動詞「ルル・ラルル」の意味機能の過剰負担の問題は、一段化によって「レル・ラレル」となっても解消されるものではないことから見て、一段化現象の一般化が尊敬形式の四段化を引き起こした直接的な要因とは考えにくいからである。むしろ、坂梨氏も示唆されているように、連体形だけではなく終止形にも「ルル・ラルル」が使用されることで、役割を奪われた古典語の「ル・ラル」が特定の意味機能（尊敬）を表す専用形式として新たに利用されるようになったという考えの方が蓋然性が高いように思われる。また、現存の「ル・ラル」が「ルル・ラルル」の語尾の「ル」の脱落によって生じたと考える方が、「レル・ラレル」の語中の「レ」の脱落によって生じたと考えるよりも変化としては自然なものと言えよう。それゆえ、「ルル・ラルル」敬語の四段化は、「ハル」敬語が成立したと考えられる近世末期よりもかなり以前に既に生じていたものと考えられるべきである。

## 5. 解釈の裏づけとなる傍証

近畿方言の「ル・ラル」敬語を「ハル」敬語からの派生によって生じたものとは考えず、古典語の「ル・ラル」敬語の末裔としてとらえる本稿の解釈は、滋賀県方言の「ル・ラル」敬語の特徴を検討することによっても支持される。以下では、湖南方言に属する水口町八田方言（筆者の出身地）の実態を記述の中心として議論を進める。

まず、滋賀県方言の「ル・ラル」敬語の特徴は、日常生活における使用頻度が極めて高いことである。これは、面と向かって話をする場合には尊敬語も丁寧語も用いない人物であっても、第三者としてその人を話題にする場合には「ル・ラル」が使用されることが多いためである。つまり、共通語などでは敬語が用いられることが少ない身近な人物を待遇する場合や普通のくつろいだ場面においても「ル・ラル」が盛んに使用されるのである（宮治 1992）。さらに、共通語では尊敬語の使用があまり一般的ではない受身表現や使役表現、さらには複合動詞の場合（これらはいずれも文法

的な文としては成立するが実際に使用されることが少ない)でも、以下のような形で「ル・ラル」敬語が普通に使用される。

- A 先生ガ 校長ニ 止められラッタ <受身表現>  
 cf. A 先生ガ 校長ニ (止められナサッ / オ止められニナッ) た
- A 先生ガ 生徒ヲ 立たさッタ <使役表現>  
 cf. A 先生ガ 生徒ヲ (立たせナサッ / オ立たせニナッ) た
- A 先生ガ 飛び降りかけラッタ <複合動詞>  
 cf. A 先生ガ (飛び降りかけナサッ / オ飛び降りかけニナッ) た

こうした「ル・ラル」敬語の使用頻度の高さは、近世期においても庶民階層では「ルル・ラルル」が尊敬の意味で頻繁に用いられていたことを間接的に物語るものとしてとらえることができると思われる。使用頻度が高いということは、受身や可能の意味との混同の可能性が必然的に高まることであり、それを解消する方向で活用に型に変化が生じることは充分ありうることである。

また、滋賀県方言の「ル・ラル」敬語は活用に型が四段化しているため、未然形と連用形の場合には、それぞれ「ラ・ララ」および「ッ・ラッ」となるわけであるが、実は「ル・ラル」に後続する形式によっては四段化しない場合がある。具体的には、打消の意味を表す「ン」や打消過去の意味を表す「ナンダ」や丁寧語の「マス」が後続する場合である。「行カル」を例にとって示すならば次のようになる。

未然形	〔打消〕	行か (*ラ / レ) ン (ならん)
		行か (ラ / *レ) ヘン
〔打消過去〕	〔打消過去〕	行か (*ラ / レ) ナンダ
		行か (ラ / *レ) ヘンタ
連用形	〔丁寧〕	行か (?リ / レ) マス
		〔過去〕 行か (ッ / ?レ) タ

すなわち、一般に四段型の活用をされるとされる「ル・ラル」敬語にも、下

二段型の活用形と見なされるものが認められるのである（実際には下一段型と形の上では同じになるが、ここでは下二段型と考えて議論を進める）。しかも、「ル・ラル」の下二段型の活用形に後続する形式（「ン」と「ナンダ」と「マス」）というのがいずれも近世上方語の資料においても既に用例が見られるものであるという事実は重視すべきである（湯沢 1962）。なぜなら、滋賀県方言の「ル・ラル」敬語が近世上方語の「ルル・ラルル」を継承するものであることを活用形の面から裏付けると考えられるからである。特に、打消の助動詞「ヌ」の音変化から生じた「ン」が後接する場合に下二段型の活用形をとるという点は、先述の近世上方絵入狂言本におけるラ行下二段活用の敬語形式の四段化に関する山県浩氏の実態調査の結果とも通じる面を持つ（「シャルル」の未然形は「ヌ」が後接する場合には四段形ではなく下二段形をとる）だけに注目される（山県 1983）。

さらに、未然形と連用形における「ル・ラル」敬語のこの特徴は、これが「ハル」敬語から派生したものととは考えにくいことをも同時に示唆している。なぜなら、「ハル」敬語の場合には、未然形が「ハラ」で連用形が「ハッ」か「ハリ」となり、下二段型の「ハレ」という形は「ハル」敬語の未然形や連用形としては認められないからである。「行かハル」を例にとって示すならば次のようになる。

未然形	〔打消〕	行か（ハラ／*ハレ）ン（ならん）
		行か（ハラ／*ハレ）ヘン
	〔打消過去〕	行か（?ハラ／*ハレ）ナンダ
連用形	〔丁寧〕	行か（ハラ／*ハレ）ヘナンダ
		行か（ハラ／*ハレ）ヘンタ
		行か（ハリ／*ハレ）マス
	〔過去〕	行か（ハッ／?ハレ）タ

それゆえ、待遇的な意味の面だけでなく、未然形と連用形における下二段型の有無という点からも、「ル・ラル」敬語と「ハル」敬語は別個に扱うのが妥当である。なお、「ル・ラル」敬語を動詞の連用形に「アル」が後

接したものからの派生（「行きアル」から「行カル」が生じる）と見る西宮氏の説も、「行カレン」という形が存在するのに「行きアレン」という形が存在しないという事実から考えるならば、やはり成立しにくいように思われる。

ところで、方言敬語としての「ル・ラル」の分布は、近畿地方だけに限られるわけではない。九州の南部や西部に広く分布する他、福井県や長野県の一部でも使用されている（藤原 1978, 馬瀬 1971）。これらはいずれも四段化の傾向を見せる（「行カル」や「行かった」の形がある）という点で近畿方言の状況と共通する。

ここで特に参考になるのは、九州に見られる「ル・ラル」敬語の実態である。そこでは、使役の助動詞は下二段活用を保持したままで四段化の傾向は認められず、また、「ル・ラル」も受身や可能の意味では従来型の下二段の「ルル・ラルル」が用いられる。それにもかかわらず、尊敬の意味を表す「ル・ラル」だけが四段化しているのである。この事実、活用型を変えることによって尊敬の意味の「ル・ラル」と他の意味での「ル・ラル」とを形の上で区別する力が働いたことを示唆するものである。

すなわち、「ル・ラル」敬語の使用の盛んな方言では、「ル・ラル」そのものの多義性を解消する方向で他の諸形式とは無関係に変化が生じうるといふことである。「ハル」敬語の使用が認められない地域においても、「ル・ラル」敬語の四段化傾向が認められるという事実から、近畿方言の場合にも「ハル」敬語と関連づけられない形で「ル・ラル」敬語の成立過程を考えることは充分可能であると言えよう。

## 6. おわりに

以上、近畿方言の「ル・ラル」敬語の歴史的な展開について新しい解釈を提示すべく、方言の実態から推定される状況と文献資料に見られる実態との相違点を位相論的な観点から統合的にとらえる方向で検討し、従来の研究及び議論に導かれる形で私見を述べてきた。文献資料における用例の

確認による裏付けがなされていない上に、論の展開自体にも牽強附会の部分が少なくない。今後は、様々な階層の話し言葉が見られる文献資料を調査することによって、「ルル・ラルル」の四段化例の確認に努めるとともに、近畿各地の「ル・ラル」敬語の実態をさらに詳しく調査することによって考察を深めていきたい。

また、方言敬語として五段化していない「レル・ラレル」を使っていることで知られる岡山県や富山県や新潟県の一部の状況をどのように解釈するか（なぜこれらの地域では五段化の傾向が見られないのか）という問題も残された課題である（藤原 1978、野口 1988）。さらには、山形市方言においては、尊敬の意味ではなく自発の意味の「ル・ラル」が四段型の活用を有するという（森山・渋谷 1988）。この問題についても、近畿方言の「ル・ラル」敬語の問題と合わせて考えていきたい。

## 参考文献

- 楳垣 実 (1962) 『近畿方言の総合的研究』 三省堂
- 奥村三雄 (1961) 「京都・滋賀・福井」 (『方言学講座』第3巻)
- (1966) 「敬語辞系譜考」 (『国語国文』35-5)
- (1967) 「近代京阪語の使役辞」 (『国語国文』36-1)
- (1990) 『方言国語史研究』 東京堂出版
- 辛島美絵 (1993) 「『る・らる』の尊敬用法の発生と展開」  
(『国語学』172)
- 小林 隆 (1983) 「<顔>の語史」 (『国語学』154)
- (1987) 「方言の史的位相性」 (『国語語彙史の研究』8)
- 坂梨隆三 (1975) 「ラ行下二段活用の四段化」 (『国語と国文学』52-1)
- 渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」  
(『大阪大学文学部紀要』33-1)
- 田中章夫 (1983) 『東京語』 明治書院
- 辻村敏樹 (1971) 『講座国語史 5 敬語史』 大修館書店



- 土井忠生 訳 (1955) 『ロドリゲス日本大文典』 三省堂
- 奈良県教育委員会 (1991) 『奈良県の方言』 奈良県教育委員会
- 西宮一民 (1959) 「奈良県方言の待遇表現について」 (『国語学』 36)
- 野口幸雄 (1988) 「西酒屋方言の他者待遇表現」  
(『新潟県高等学校教育研究会国語研究』 19)
- 彦坂佳宣 (1989) 「東海西部地方における断定辞の史的動向」  
(『国語学』 157)
- (1991) 「東海西部地方における尊敬語の分布と歴史」  
(『国語学』 166)
- 藤原与一 (1978) 『方言敬語法の研究』 春陽堂
- 馬瀬良雄 (1971) 『信州の方言』 第一法規出版
- 松浦信子 (1962) 「大阪府に於ける『ル・ラル』と『レル・ラレル』  
敬語について」 (『女子大國文』 27)
- 宮治弘明 (1987) 「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」  
(『国語学』 151)
- (1992) 「方言敬語の現在」 (『日本語学』 11-11)
- 森山卓郎・渋谷勝己 (1988) 「いわゆる自発について」 (『国語学』 152)
- 山県 浩 (1982) 「活用型の変化から見た上方絵入狂言本」  
(『文献探求』 10)
- (1983) 「活用型の変化から見た上方絵入狂言本」  
(『文献探求』 11)
- 山崎久之 (1963) 『国語待遇表現体系の研究』 武蔵野書院
- 湯沢幸吉郎 (1962) 『徳川時代言語の研究 上方篇』 風間書房

(梅花女子大学文学部講師)